

矢島 渚男 選

水澄んで空仰きたき泥鰌かな

岡山市 西尾 照常

【評】ドジョウはときどき浮いてきて、空気を吸っては沈むことがある。それは彼らも空を仰ぎたいからだと考えた。こんなに綺麗な青空を見ない手はない。

荒縄のゆるみ始まる干し大根

深谷市 三上 通而

【評】荒縄で大根を束ねて干す。干しあがったところで漬ける。その目安は荒縄の緩み具合。丹念な観察が優れる。栽培している方だろうか。忘れ潮に小さき命秋日和

枚方市 衛藤 聡一

【評】干潮どきの岩礁の水溜りには、小魚や藤壺、海藻をはじめ、沢山の命が舞めいている。それを慈しむように眺めて時間を忘れた。

木の上の明恵の詠みし月あかし

伊賀市 福沢 義男

初めての稲刈り園児稲穂上ぐ

岩田市 西岡さちよ

手刀でアリガト響者の秋の道

飯田市 井原 修

忘れゆく人の名花の名神無月

越谷市 花井芳喜代

肉球で猫が顔ふく星月夜

宮崎市 長友 聖次

サロマ湖に溶ける夕日や七竈

春日部市 中沢 泰三

秋耕や馬糞匂ひし少年期

青梅市 松野 英昌

つゞ

宇多喜代子 選

はたと晩年すでに晩年金木犀

東京都 斎木百合子

【評】同齢者の多くの共感を得るだろうと思われる句。「はたと」すでに「なご」の言葉がうまく生きており、下五の「金木犀」にも説得力がある。遠くまで遠くまで見ゆ山の秋

千葉市 小林 昭

【評】下五の「山の秋」が広がりを出している。遠方の景が見えるのも秋ならではである。「遠くまで」を重ねたのも秋の気配の透明度をよく言い表している。

秋深し顔に風くる米寿かな

福原市 城 恵己子

【評】米寿までよく生きたものだというひそかなる自祝の句。顔にくる風に、今日生きているといういきいきとした実感がある。

冬近し何か忘れて来たような

神奈川県 中村 昌男

とび石の三角四角月の庭

神戸市 増田キヌエ

小春日や赤子にもある土踏まず

龍ヶ崎 小宮 光司

夕月や空は青さをまだ残し

新潟市 大竹 健一

子らの列ビニール袋に透く団栗

我孫子市 森住 昌弘

小走りの猫は影絵に月の庭

海老名市 山田 山人

見はるかす上毛三山紅葉燃ゆ

松戸市 倉林 高次

つゞ

正木ゆう子 選

わが町に蹴る石もなき残暑かな

千葉市 笹沼 郁夫

【評】確かに。舗装道路に石はない。学校帰り、凸凹道の石を蹴り蹴り歩くのは、無為の豊かさに満ちた時間だった。その辺に転がって、夕日に影を作っていた石たちよ、いま何処。新米よ独りごちする夕餉かな

川崎市 堀尾 笑王

【評】「今日から新米よ」「やっぱ美味いな」などと言う相手がいないときも、自分で自分に言う。口に出さずにはいられない新米の嬉しさ。見える夢覚めて見えぬ目虫すたく

宮崎市 藤田 長汀

【評】ああそうなのだと胸を衝かれる。経験者しか詠めないし、同じ経験をしている人はよくぞ詠んでくれたと思うだろう。季語が効いている。恋すれば癒える肩凝り草の花

小鳥来る後ろ歩きの子三百歩

志木市 谷村 康志

聞き耳を立てて南蛮煙管かな

京都市 根来美知代

鶴鶴のきれいな駅に待ち合はす

相模原市 大沼 卓郎

断崖の枕を捨てて鷹渡る

宇陀市 泉尾 武則

ラ・フランス黒いネイルが驚つかみ

川崎市 沼田 広美

対岸の稲架まつ直ぐに匂ひくる

山形県 沼沢さとみ

武蔵野市 渡辺 一甫

小澤 實 選

腹黒きことこそ良けれ鯛焼は

埼玉県 小町 季生

【評】「腹黒き」といえば、たいがい嫌なことであるはずのだが、鯛焼の場合はいい、というのである。腹に黒い餡がたっぷり入っているから。こんな機知の句も楽しい。

再会に叩く背中や紅葉山

高知市 加田 紗智

【評】紅葉の盛りの山での再会。おもわず久しぶりに会った友の背中を叩いてしまう。親しさの現れであり、紅葉に高揚しているのだ。

東京都 中島 徒雁

【評】人間にとって、猛毒で知られている天狗苺を、栗鼠が平気で食べている。栗鼠にとっては、無害なのか。自然はふしぎだ。

和らぎの水やはらかに今年酒

東京都 森 一平

目を閉じる湯浴みの猿や初時雨

さいたま市 新原 健

肉球に保湿クリーム冬めきぬ

高岡市 池田 典恵

犬と尻覗き合つて露の朝

長野市 中里とも子

野葡萄の実やシャガールの絵の具箱

東京都 中沢 治美

秋冷のエスカレーターみな無口

伊勢市 藤田ゆきまち

牛と豚二刀流なり芋煮会

守谷市 久保田洋二